

# 中国市民と朝鮮戦争<sup>(1)</sup>

——「毛沢東の朝鮮戦争」の陰翳から——

陳 肇 斌

はじめに

現代中国にとって、朝鮮戦争の勃発が「国の平和と安全に重要な影響を与える」ことになりかねない初めての「周辺事態」であった。「安全保障環境が大きく変化した」と見られた中、それに「海外派兵」すべきかどうかということを含めて、戦争と平和に関するさまざまな問題が浮上した。戦争が勃発した一九五〇年六月二五日から中国軍の出兵まで約四ヶ月の間、これらの問題は中国市民の間でどのように考えられていたのか。本稿の目的はこの設問に答えることである。

中国の朝鮮出兵について、学界では、これまで主としてその政策決定、いわば「毛沢東の朝鮮戦争」のように、毛個人および中国共産党指導部の政策決定にもつばら焦点が当てられてきた。研究の依拠した資料、解釈の特徴に即して、大まかに言えば、新聞、文献資料に基づいて、東西対立の現実を反映してイデオロギー要因を重視した時

代から始まり、中国の改革開放後、一九八〇年代に公開された中国側の一次資料や関係者の回想録、取材に基づいて、中国の安全保障を含め国家利益の観点から観察されるようになった。<sup>3)</sup>その後、冷戦の終結によって旧ソ連側の一次資料への接近が可能となり、中ソ関係の側面から実証的に照射されるようになった。<sup>4)</sup>

しかし、資料は豊富になったが、研究の基本的な視座は、相変わらず毛沢東ら政府当局者に設定され、それ以外の一般市民の反応は、ほとんど議論の俎上に乗っていない。当局者に研究の焦点があれば、市民は当然、政府の政策が貫徹される際に誘導されるべき対象として位置づけられるほかに、かれらの反応は基本的に「親米恐米」感情として総括的に叙述されるにとどまり、それ以上に具体像をあきらかにする必要もなかった。

そのため中国市民は、朝鮮戦争当時、最高権力者であった毛沢東によって政策決定の過程からその存在が一度捨象され、その後、毛沢東に焦点を当てた研究者によって再度、歴史からその存在が捨象された。しかし、市民に焦点をあてれば、それまで「親米恐米」という記号でしか捉えられなかった意見や感情はより具体的に観察され、平和を希求する非(避)戦・厭戦・反戦感情の流露として理解されることが可能となる。長年にわたる内外戦争を経たようやく平和が訪れた当時の時代背景を考えれば、このような位置づけ方がより自然と考えられるからである。

本稿の対象とする地域は、華北、華東、東北、西南と広い範囲にわたるが、それぞれの主要都市を中心に上げる。叙述にあたっては、市民一般の反応について点描し、それを遠景にしながら、そのうち特定の個人を必要に応じて適宜クローズアップして詳述するというように、濃淡をつけて朝鮮戦争に関する市民の「声なき声」の復元を試みたい。

## 一、華北地域

### 1、北京市

朝鮮戦争勃発後、北京市民に広く動揺が見られた。それは、まず市場の変化に現れた。北京の市場では、七月二六日付の新華社通信によれば、「投機商人がふたたび活躍はじめ、市民はそれに盲目に追随した。」その結果、まず市民の台所に直結する食糧市場では、「取引高や米麦以外の穀物価格、小売販売量のいずれにおいても、明らかな変化が見られた。」次に、乱世につよいと中国の伝統文化で固く信じられた金の市場価格は、戦争勃発前日の六月二四日の一両<sup>リヤン</sup>あたり一一七万元から、三〇日の一三五万元に上がり、一週間で二五・四%ほど高騰した。また抗生物質のペニシリンは、輸入に頼っていたため、一本あたり一万五百元から一万四千元に、三三%ほど暴騰した。他方、輸出品の羊毛については、「六月二六日に輸出の一時停止の行政指導が通達され、それが皮革商人によつて国際市場の変動と関連づけられ、情勢が緊迫したことを理由に買い控えられ、価格は急落した。」五ヶ月ほど前に設立された北京証券取引所での株価も、「同日の一五八万元から、六月二八日に九七・六万元の最安値をつけ、その後はわずかに持ち直した程度であった。」<sup>(5)</sup>投資家の不安は、八月二八日にアメリカ軍機による中朝国境侵犯が報じられた後、一層強まった。新華社北京支社の報告によれば、有力銘柄であった啓新株式の価格は八五万元から七七万元に下がり、一時は七一万元まで暴落し、他方、金は戦争勃発直後の最高値ほど高くないが、それでも一両あたり一三一万元と高止まりであった。<sup>(6)</sup>

物価の高騰は市民生活を直撃した。中央政府の出版総署編集審査局第一処長を務めた宋雲彬の家計も例外ではなかった。宋の日記によれば、当時五三歳の彼の六月後半分の給与は五万三千元であつたが、そのうち家賃、水道等を引かれ、手取り額、四六万六四〇〇元が支給された。八月四日の項の日記記事では、「近来、粟の価格が下がり、豚肉、白砂糖およびその他の日用品は軒並み騰がった。毎月の収支が合わない」と記されている。つまり、給与額の算定基準となる粟の価格が下がったが、給料で購入しなければならないその他の生活必需品は上がったのである。宋の購入した「三枚の中古の竹の簾は一八万円かかった」とあるが、一ヶ月の給料の約一七%を占めた。ちなみに、標準的な大卒初任給は「月に粟一二〇キロ」と規定され、給与計算の準拠した粟の価格が八月に一キロあたり二〇五〇元であつたことから換算すれば、二四万六千元に相当した。<sup>8)</sup>

粟価格が下落したのは、初夏に豊作した穀物を調達して商品価格の高騰を抑える政策を政府がとつたからである。七月六日に、国営貿易会社から食糧と綿布類が大量に市場に放出され、食糧価格が戦争勃発前の水準に回復し、綿布価格も戦争勃発前よりやや下回つたほどとなり、市場は安定するようになった。しかし「輸入品であつた五金類、ゴム、灯油、医薬品の価格は、相変わらず高騰を続けた。」たとえば、漂白剤は、七月四日に一六・六%（六月二八日比）、一二日に四八・二%（七月四日比）、二〇日に六・〇二%（一三日比）と騰がり続け、台湾産の白砂糖は七月二〇日に八三・三三%（六月二八日比）騰がつたと報じられた。<sup>9)</sup>衣食にかかわる基本的なもの以外の多くは輸入品に依存した当時、市民の日常生活の受けた影響の大きさがうかがわれる。

以上に述べた状況のなかで、北京市民は朝鮮戦争に関連する活動にどのようにかかわつたのか。ちょうど当時の北京城内にあつた九つの行政区のうち、天壇周辺を管轄する第九区の役所に設けられた「アメリカの台湾・朝鮮侵略に反対する宣伝委員会」の活動総括報告書が残っており、それに基づいて以下に紹介する。八月五日付の同報告

書によれば、七月二四日から八月一日まで「宣伝週間」が設けられ、その初日に区内の労働組合が発起人となって、中ソ友好協会、共産主義青年団、女性団体に呼びかけ、集まった関係者から区の宣伝委員会が結成された。そこで「各組織内において宣伝活動を展開し、どこの組織にも属さない市民にもなるべく加わってもらう」ことが決定された。<sup>10)</sup>

宣伝活動は、幾つかの拠点を中心に展開された。第一、労働組合である。二四日の夜に、区内の一四の大手企業と団体から一九人の宣伝教育委員が集まり、文化宮で行われた鄧拓・北京市副市長の講演の内容が伝達され、活動について打ち合わせた結果、「各工場で掲示板、講演会、座談会、街頭宣伝等、あらゆる媒体・方法を利用して反米宣伝を行うこと」が決定された。それを受けて各企業・団体で、それぞれ「全職員大会が開かれ、計七六〇名が参加した。そのうち、丹華工場と天壇防疫所は、それぞれ宣伝チームを組んで街頭に出かけて宣伝し、約三〇余名の聴衆の関心を引き付けた。」また、産業別労働者、読み書き補習学校に通う労働者を対象に、八回にわたって市民大会が開催され、計一五〇〇名の参加を得た。その内訳は、マツチ製造業、鉄工業、紡績業、染色業、電気鋸業、人力運送業、大八車運送業、三輪車運送業、小売販売業、清掃業等が含まれ、多岐にわたっていた。<sup>11)</sup>

第二、中ソ友好協会である。協会各支部の責任者会議が開かれ、非会員をも勧誘してそれぞれの支部で会員大会を一回ほど開催することが決定された。それに従って各支部は、計一四回の市民大会を催し、約四二〇〇名の参加を得た。そのうえ、「映画を余興にした講演集会を一回、夜間に行い、約一二〇〇余名の会員の参加を得た。また支部内の派出所の黒板掲示を利用して宣伝を行った。教員支部は児童劇団とともに街頭で劇を演じ、一〇〇〇余名の市民に対し宣伝活動を行った。さらに各支部の平和署名活動は、一三七〇名の市民から署名を集めた。」

第三、成人補習学校である。まず補習学校の教職員と学生計七〇〇余名を対象に時事講話が行われた。「三つの

成人夜間学校が「腰鼓隊」（小大鼓チーム）と「秧歌隊」（田植え踊りチーム）を編成し、四夜にわたって街頭に出かけて宣伝活動を行い、五〇〇人ほどの観客を得た。」二つの町内（ジェレウの）で婦人座談会が催され、五〇人の参加を得た。また、工商中等教育学校の漫画クラブ員らが街頭で宣伝漫画の製作に取り組んだ。

第四、区の政府委員会や区役所の各派出機構、税務所である。それぞれ座談会が開かれ、とくに各派出所では、早朝の学習時間を利用し、朝鮮と台湾問題について討論が行われた。先農壇の行商管理処もこの問題を中心に、行商業者のうち積極的な人たちを集めて座談会を行い、七〇人の参加を得た。また各町内では、共産党員と青年団員を対象に、党の方針を伝達する会議が開催されたというのが、同宣伝委員会の報告であった。<sup>(12)</sup>

北京は教育機関が集中した地域であり、本来とくに大学生が動員の重点的対象のはずであったが、夏期休業中に加えて、第九区が下町地域に位置したこともあり、教育関係に関しては、前述の工商中等教育学校の漫画クラブ員の活動以外はこの報告書では何ら言及されていなかった。しかし、別の区に校舎があつた北京大学では、夏休み中にも大学にとどまった学生を中心に「夏期活動委員会」が結成され、以下のような活動が行われたことは確認できる。「北京大学紀事」によれば、七月一五日にキャンパス内で歌舞演劇の夕べが催され、同「大学の文芸サークル、私立貝（ブリッジ）満女子中等教育学校、育英中等教育学校、華僑同窓連合会、青年芸術劇場等と共同で」、朝鮮戦争反対および革命後の農村生活を題材とした出し物が上演された。翌日、「夏期青年講座シリーズ」の第一講として、時事問題に関する柯柏年・外交部米豪局長の講演が実施され、八月に一ヶ月間ほどロシア語の補習クラスが設けられた。学生らは学内にとどまらず、街頭活動にも繰り出した。七月二三日に、「夏期休業中に帰郷せずに寮生活を続けていた学生二〇〇名は女子第一中等教育学校、男子第八中等教育学校の一〇〇名近い生徒と共同で小鼓隊や唱歌隊、講演隊を結成し、市内の第二、五、六区にそれぞれ赴き、宣伝活動を行い」、朝鮮戦争関連の宣伝や平和署名の呼

掛けを行った、と記録される<sup>(13)</sup>。ただ、これらの活動は多分に共産党の指導のもとで行われたものであり、それに関わった学生一人ひとりの声は確認できない。

それに比べて、第九区の市民の具体的な声や反応は一部、前述の報告書に記録されている。それによれば、天壇人力車夫大会が開かれた際、「朝鮮人民は必ずアメリカ帝国主義を打ち負かすことができる」と述べた人がおり、「朝鮮軍がアメリカ軍よりも強い」と述べる人がいた。しかも、中ソ友好協会の会員のうち、「朝鮮で戦争が進行しているにもかかわらず、われわれの物価が安定していることからみても、必ず勝つと思う」と語る人もいた。また、大会の出し物として朝鮮戦争に関連する劇が演じられる最中、「朝鮮の李承晩は中国の蒋介石だ」との比喩を聞かされたある観客は、李を扮した俳優に対して「異常な憎しみを抱いた。」そのため、その俳優は「観客に罵倒されるのを恐れて公演終了後に一人で帰宅する勇気を失った」というような事態が生じた。さらに、小さな子供を抱いて出席したある年配の婦人は、「思ったとおりだ。第三次世界大戦は起きるわけがない」と述べた、と報告された<sup>(14)</sup>。

この婦人がどのように「先見の明」を持てたのかは定かではないが、ウォルター・リップマン一流の表現で言えば、外交問題に「充分な信条」をもつが、みずから扱う食料雑貨についてはさまざまに迷う街の食料品屋や、聖礼典については完璧な理論をもつが、その食料品屋と結婚していかどうかとなると逡巡する若い婦人にみられたものなるうが、それは言うまでもなく、古今東西、職業や性別、宗教を問わず、人類一般にみられるものであった。ここでより注目すべきは、世界大戦誘発の可能性を否定することがこの大会の内容の一つとされたようである、そのことから多くの市民が大戦に強い不安を抱いていたことが読み取れるという点である。

実際、同様の不安は、宣伝を受けて考えが変わったとの趣旨で報告された外の事例からも観測された。天壇防疫所の一部の関係者は、「以前、第三次世界大戦を恐れていたが、座談会開催後はそのような不安は解消されたこと

を認めた。」また、当初、「朝鮮戦争は自分たちとあまり関係ないと思っていた人も、今やアメリカ帝国主義がわれわれの敵であり、生産に専念し、派出所の行っているスパイ摘発活動に協力することも米帝と戦うことだと認識するようになった。それまで態度を決めかねていた市民もまた、勝利することに強く自信を持つようになった」と報告された。これらの事例に見られた「変化」を確認することはできないが、むしろ宣伝を受ける前の北京市民の不安や躊躇の一端はうかがわれる。

そのことは、宣伝の効果が薄かったとの趣旨で報告された事例からより明確に確認できる。街頭宣伝に対して「宣伝話なんて信じるものか」と否定する人がいた。また、「メリケン粉を食べるのを楽しみにしている」と辛辣に語る人もいた。むろん、それはアメリカ軍による北京占領を予期した上での発言であった。さらに、「それを言っている場合か。アメリカの原子爆弾一つでお仕舞だよ」と大声で怒鳴る人もいた。以上の市民の紹介に加えて、「原爆を恐れる市民は実に多い」という報告者のコメントも報告書に付された。同時に、一年前に共産党に寝返りした北平地域の国民党軍が新政権から離反してその総司令官を務めた傅作義は「山西省に行ってしまった」とか、国民政府の総統代理を務めた「李宗仁は、東北地方にまで攻めてきた」といったような風聞があり、「敵対勢力」による流言飛語として位置づけられたが、北京市民の動揺は看取される。

## 2、天津市

同じような動揺は、近隣の天津でも観測された。戦争勃発四日後の六月二九日付の『天津日報』通信によれば、「市民はみな第三次大戦を恐れ、平和を真摯に望んでおり」、その願いから、ある床屋では、「三八度線まで引き上



げるのを国連が求めているのだから、北朝鮮はそれに応じればいい。そうでないと、第三次世界大戦になりかねない」という意見が語られ、またアメリカの軍事介入によって台湾問題の解決が困難となったことについては、「譲ってやればいいじゃないか。大陸地域の建設だけでも手一杯だから」という議論が交わされた。市民の間で、政府の宣伝に疑問が呈され、「戦争はいつたい南北朝鮮のどちらが先に始めたのか。なぜ軍事力が弱いはずの南が先に戦争を起こしたというのか」、「第三次世界大戦が起きるのか。起きそうになれば何故アメリカ軍が介入したのか」という意見もあつたと報告された。<sup>17)</sup>

時間の経過とともに、市民の戦乱に巻き込まれる不安は、一層高まった。七月七日付の『天津日報』通信によれば、「平壤が米軍機による爆撃を受けてから、避難民は空襲を逃れるべく朝鮮から我が国の東北地方を目指し始めた。瀋陽にはすでに多くの朝鮮人難民がいる」と噂され、また、「李承晩を支援すべく二個師団の国民党軍が台湾から派遣された。すでにアメリカの艦艇で釜山に上陸した」との風聞も広まった。<sup>18)</sup> 朝鮮戦争と国共内戦が連動するものとして認識されたようである。

朝鮮の国内問題として戦争が半島にとどまらないであろうという認識は、天津地域の商人の間でも広く共有された。かれらによれば、「朝鮮南部がアメリカの影響下にあることから、かりに李承晩が惨敗した場合、アメリカの敗北を意味することになる。それについて何もしなければ、アメリカは資本主義陣営における威信が地に落ち、将来他の資本主義国を支配することができなくなる。だから武力で李承晩を支援したのだ。もし李が勝てず、アメリカが逆上して事態が拡大したら、第三次大戦が起きる可能性が生じる。他方、かりに北朝鮮が負けた場合、朝鮮人民軍は必ずわが国の東北地域に退いてくる。その際、わが国がその武装解除に出れば、社会主義国家間の相互協力の精神に反することになる。かりにわが国が朝鮮人民軍の武装解除をしなければ、アメリカは口実を得てわが国の

東北地域に進撃してくる。わが国政府も当然それに反撃する。そして戦争の規模は徐々に拡大し、第三次世界大戦に変わっていく。」いずれにしても、世界大戦は避けられないと認識されたのであるが、その議論では、北朝鮮の敗残兵が国境を越えて避難してきた場合、価値観イデオロギイを共有する国同士との理由から武装解除の拳に出ることができないであろうとの予測にとどまり、「海外派兵」してまで準同盟国を助けるというような選択肢、すなわち「集団的自衛権」の行使は視野に入れられていなかった。

米軍が三八度線を越えて北上した十月初旬以降、天津市民の間で、東北地域における防空関係の伝聞に関連して、「情勢が緊迫してきた」と認識されるようになった。当時政府の進めていた物価調整や「敵対勢力」への弾圧等の措置が全て戦局に関わる動きとして捉えられ、世界大戦はいっそう現実性の高いもののように思われた。賃貸住宅が見つからないことも「東北からの避難民が急増したため」とみられ、世の中の動向は敏感に受け止められた。<sup>(20)</sup>

こうした情勢のなかで、経済界の上層部は、政権との交渉が多いことを考慮したためか、「困難な状況から政権が成立して間もないが、毛主席は何とかしてくれるであろう。落ち着いてそれぞれの職分を尽くすべきと表向きは表明している」が、彼らのうち、「いま戦争が起きたらアメリカにとつて有利だ」として空爆を恐れて工場の新規開業を控えた大企業主がいたことから、本音は異なつたようである。ある経営者は組合幹部に対し、「新聞で朝鮮での戦況はどう報じられているか」とわざと聞き、「アメリカが張子の虎とか言われていたが、最近、新聞ではあまり読まなくなつたね」と挑発した。中小企業主の間では、世界大戦になるのを忌避して、「米軍が三八度線を越えたとしても、われわれは巻き込まれない方がいい」との意見が語られた。<sup>(21)</sup>

労働者や学生の間では、中ソが北朝鮮を支援したような情報がないことから焦燥感を募らせ、「抗議ばかりしても通用する相手ではない」、米軍が「三八度線を越えたのに、何故まだ反撃しないのか」と主張した勇ましい論調

もみられたが、他方、大戦の影響で都会から山村に追い出されて「ゲリラ戦を強いられる」ことを恐れる青年もいた。キリスト教会の信者には、朝鮮戦争を「神の意思」によるものと捉えたり、「アメリカが原爆を使わないのは、蒋介石の口添えのお陰だ」、「新聞では勝ったと報じられるが、負けたことは報道されない」と語る人もいた。<sup>(22)</sup>

その他の市民も、同じように世界大戦を危惧した。たとえば、大学教授の間では、「第三次世界大戦は避けられなくなった」との悲観論が蔓延した。しかし公に表明されたのは、時事問題について「当局の説明を新聞紙上で増やして欲しい」という希望にとどまった。ただ、同時期に、極少数ながら、「中国の武器は駄目、空軍も駄目だ」、「大都市はもうもたないだろう」と語る教授がいたことから、教授一般の本音はうかがわれる。大戦への不安が情報不足への不満として現れた状況は、業種を問わず広く見られた。朝鮮戦争について新聞は「これまで法螺を吹きすぎたが、いまは記事を小さく扱っている。あまりにも内容が薄く、しかもタイムリーではない」と社会各界から批判されたのである。市内の各役所に勤務した人々のところにも確実な情報が入らず、「工場は他所に移る」、「鉄道の軍事輸送量が増えた」、「すでに除隊した元将校を再登録し、遅くて来年一月には充員召集する」といった断片的な情報だけが飛び交い、それに戸惑った公務関係者からは上級幹部による時事関係の講話が受けられる場を設けるよう希望された。<sup>(23)</sup>

以上のような世界戦争への不安は天津の経済市場にも反映された。新政権のもとで辛うじて命脈が保たれた天津証券取引所では、『天津日報』六月二十九日付の通信によれば、啓新セメント会社の「株価は六〇%暴落した。」一部の投資家の間で、「朝鮮の内戦は米ソの支持を受けて起きたため、世界大戦の始まりだ」と受け止められたのである。<sup>(24)</sup> 株価以外、「金の取引価格は、闇市では一両あたり一五八万円、銀貨は一枚あたり一万三千一〇〇元に騰がり、ペニシリンは一本あたり一万五千元、肺炎の治療薬は四万六千元に、それぞれ暴騰した。」<sup>(25)</sup> 輸出入商人の間では、

スイスがすでに二か月分の食料を備蓄したと英紙で報じられたことと、「軍用毛布の生産に必要とされる」羊毛に對する米ソからの需要が高まったこと、それに加えて先の世界大戦が九月から始まったことから、「今年の九月から第三次世界大戦が勃発するであろう」と推測された。<sup>(26)</sup> また、朝鮮戦争によって海上輸送に支障を来たしかねないことに対応して、「近く戦争関連の保険料が取られる」ことも天津の商工業者の間で予想され、価格高騰につながった。<sup>(27)</sup> さらに、香港からの対中輸出がイギリスによって禁止されることを報じた外国電信があったため、そのリストに連なる鉄板、ワイヤ・ロッド、ベアリング、ガソリン等一一品目の物資は全て市場価格が騰がった。その関連で、上昇幅のより大きい上海市場に鉄板が大量に流出し、これも価格の高騰に拍車をかけた。<sup>(28)</sup>

このような市況は、同時期に中央政府貿易部でまとめられた朝鮮戦争勃発後の主要都市における輸出入品の価格変動に関する報告によっても裏付けられる。八月一六日付の同調査報告には、六月二四日から七月七日までの二週間における天津市の輸入に頼る主な工業原料の価格変動が記されている。それによれば、保存食品用の食品缶の材料であるブリキ板は一箱あたり一〇五萬元から一二〇萬元に一四・三%、皮革業用のタンニンエキスは一トンあたり一六〇〇萬元から一八八〇萬元に一七・五%、アメリカの大手化学工業企業のモンサント社製の人工甘味料サツカリンは一ポンドあたり一五萬元から二〇萬元に三三・三%、薬品のベニシリンは一本あたり一万一七〇〇元から一万四五〇〇元<sup>(29)</sup>に二三・九%、八〇ポンドのドーリング紙は七一萬元から九〇萬元に二六・七%、白砂糖は一キロあたり一〇万三〇〇元から一九萬元に七四・六%、金は一両あたり一一八萬元から一四九萬元に二六・三%、それぞれ騰貴した。

天津は対外貿易港をもつ工業都市であり、中国経済全体の行方を占うほど重要な存在であった。その意味において、以上に述べた天津の市場動向は、天津のみならず、それに依存する内陸部の商工業者を含む市民一般の不安感

とも密接に関係したものであった。事実、各種物資の価格高騰には、前述の貿易部の報告書で指摘されたように、天津市の企業のみならず、華北・東北各地の企業による買占めも大きな一因として関わっていた。たとえば、天津市の企業はすでに一〇〇〇トンのワイヤ・ロッドの在庫があるにもかかわらず、市場で購入し続けていたが、それと同じように、「河南省の鄭州、山西省の太原、遼寧省の錦州のそれぞれの鉄道局や、東北工業部など、市外の各地の公営企業も天津で工業原料を調達している。それぞれの計画によれば、銅線に限ってみても三〇〇〇トンに達している。そのため、天津市場の金属類物資の供給は需要に追いつかなかつたのである」<sup>230</sup>このことから、北部中国全域における市民の朝鮮戦争に巻き込まれることへの強い不安がうかがわれる。

## 二、華東地域

### 1、上海、杭州

世界大戦に対する市民の強い不安およびその反映として物価高騰が生じた点においては、華東地域の中心都市である上海も例外ではなかった。朝鮮戦争が勃発した当初の二週間の市場変動をみれば、機械工作用の鋤は一本当たり二万八〇〇〇元から三万五〇〇〇元に二五%、鋸は一ダース当たり二八万元から三七万元に三二・一%、紡績染料の原料となる硫化染料サルファ・ブルーは一バレル当たり一二五万元から一五〇万元に二〇%、漂白剤は一バレル（一三〇ポンド単位）当たり二三〇万元から二五〇万元に八・七%、マツチ生産用の重クロム酸カリウムは一ポンド当たり六六〇〇元から九五〇〇元に四三・九%、防水加工用のパラフィン・ワックスは一袋当たり五〇万元か

ら七〇万元に四〇%と、それぞれ上昇した。市民の日常生活により密接な関係にある生活必需品も、電球は一個当たり二二五〇元から三六〇〇元に六七・四%、ガーゼは一ダース当たり六三万元から七〇万元に一一・一%、砂糖は一キロあたり八六〇〇元から二万六〇〇〇元に八六%と、それぞれ高騰した。<sup>(31)</sup>

旧フランス租界系の電気水道電車会社の労働組合員の間では、トルーマンの声明と周恩来の声明は「どちらも強硬すぎて、強硬もの同士がぶつかる」と世界大戦になりかねない、「これからはソ連の出方次第だ。もしソ連も前面に出て北朝鮮を支援するようになったら、第三次世界大戦は間違いないだろう」と語られ、不安は隠されなかった。六月二九日を例にとれば、従業員は「誰も彼も新聞『解放日報』の配達を待ちかねて、どこの作業場でもどの路線の電車内でも、この話題で持ちきりであった」<sup>(32)</sup>

また、中国紡績建設公司第一〇工場では、新華社通信によれば、「一部」の青年団員と若い労働者は世界大戦を予想して「毛主席の言うことには間違いない。戦争になったらわれわれは銃後で生産して解放軍を支える」と述べて対米強硬策を支持したが、「アメリカ人はこれまで叫び続けてきたし、今回もそんなものだろう」と大戦の可能性を否定する労働者も「一部」いた。そのほか、「われわれは普通に働いて平穩に暮らしたい。できるだけ戦わない方がいい」と「非戦」を表明する労働者も「一部」いて、意見が分かれた。この通信記事に記された「一部」とは具体的にどの程度の人数を意味したかは不明であるが、アメリカの軍事力に対する認識に関しては、正確な数字が同記事において用いられている。つまり、同工場から上がってきた情報によれば、「自分の経験に基づいて、アメリカ帝国主義は、空威張り、で、だらしな、い、ほど米兵が弱い、台湾の解放は問題なし」という認識をもっている年配の労働者も三名（傍点―陳、以下同様）いたが、「大抵の労働者はアメリカの力を強大と認識している」と報告された。<sup>(33)</sup>

上海復旦大学では、『解放日報』通信員からの七月四日までの報告によれば、「一部の教授は戦争勃発後から毎日欠かさず、ラジオ放送ボイス・オブ・アメリカを注意深く聴き、形勢が不利になった場合、東北地域に影響が及んで、第三次世界大戦の勃発に繋がりがかねないと懸念した。」一部の教授はトルーマン声明を見て、「まもなく世界大戦が勃発し、上海はすぐ原爆の脅威にさらされるかもしれないと恐れた」と報じられた。<sup>34)</sup>

アメリカのラジオ放送から情報を入力し、朝鮮戦争の動向に深い関心を寄せていたのは、復旦大学の教授陣に限らず、上海地域の教育関係者の間で広く見られた光景であった。当時カトリック教会系の震旦大学で兼任教授をしていた歴史家顧頡剛の日記記事からもうかがわれる。六月二六日の項には、「南北朝鮮間、昨日、戦端が開かれた。米国ラジオによれば、北側が南側を攻撃した由。当地の新聞では、南側が北側を攻撃したと報道」と記され、二日後、「今晚ラジオを聴き、アメリカは陸海空軍の動員に着手し、各政党が一致してトルーマンを支持し、民主国家への共産主義の侵略に抵抗する」と記されたのである。顧は戦争の性格について、「昨年来の伝聞通り」現実となつた第三次世界大戦の発端と位置づけ、「吾輩は毫も力なき故、惟静かに天命を待つのみ」と当初から無力感をあらわにし、二日後の二八日にも、「上海に戦火が及ぶのも時間の問題だ。中国人はまたひどい目に遭わされる」と諦観していた。<sup>35)</sup>

顧は北朝鮮の攻勢を受けて米軍が退却した状況について、「国共内戦中に徐州攻略の際に中共が実施した人海戦術を北朝鮮が行つたため、米軍は後退せざるを得なかつた」と記し、戦況には決して樂觀的ではなかつた。とくに八月二三日と九月一日の項にそれぞれ、「これまで米機による朝鮮爆撃は一日当たり七〇〇〜一〇〇〇トンに達する。無辜な朝鮮人民は米ソ対立の巻き添えで死んで行き、誠に不幸だ」、「北朝鮮の多くの町は飛行機から識別できないほど米機によって爆撃され、道路、鉄道も均しく深刻な破壊を受け、輸送はもっぱら人力に頼る由」と記され

たことからもうかがわれる。<sup>(36)</sup> また、八月二七日の項では、政府の戦争準備のために進められていた施策について、市民のすでに困窮していた生活が一層圧迫されるであろうという観点から、次のように明確に批判を加えた。

「上海の大場、龍華、江湾の各空港の拡張工事が均しく進められ、農家の田んぼは一面↑(約六六七平米)あたり米七〇石で収用された。戦争情勢が緊迫し、仮に日本が国連に加盟すれば、再びわが国土を縦横無尽に駆け巡ることとなる。国外情勢と相まって、国内では、公債が発行され、人民が離散し、責めを負うものは、自殺、発狂もしくは逃亡に追い込まれよう。これほど貧しく弱い国は如何に世界大戦に耐え得るか」<sup>(37)</sup>

復旦大学の学生はどのような態度を見せたであろうか。新政権から強く影響を受けた「進歩的な学生」は、トルーマンの声明に憤慨し、「毛主席の呼掛けや周恩来外相の声明および朝鮮人民軍の進撃に大いに興奮した。」ただ、そのような学生以外は、時事問題に関心を示さない学生もいれば、「第三次大戦勃発の危険に疑念をもつ」学生もいた。さらに、トルーマンの声明をみて「興奮する学生も少数ながらいた」と報告された。これは新政権を受け入れず、アメリカの軍事介入を機に国民党が政権に復帰するかもしれないことに「希望」を見出した青年が見せた反応と考えられる。このように学生の態度が分かれた状況は、同済大学と交通大学にも同様にみられた。<sup>(38)</sup>

これらの大学生のうち、当時、卒業を控えていた顧頡剛の姪、高瑞蘭もいた。復旦大学四年生であった高は、顧の日記によれば、進路のことで悩まされ、「甚だ苦痛で憔悴しきった」様子であった。本人は「母親や叔父の面倒をみるべく実家に近いところでの就職を希望したが許されなかった。」卒業後の進路決定に大きな影響力をもつ大学の青年団側が彼女を土地改革運動に加えさせようとしたが、土地改革は地主らの激しい抵抗に遭って身の安全に



問題が生じかねないことから彼女は躊躇した。しかしそれに参加しなければ、朝鮮に近い「東北地域に行くか」、または台湾進攻作戦を担う「第三野戦軍に入隊するしかないため、相変わらず安全とは言えない。いずれも断りたかったが、それでは将来が断たれてしまう」とのジレンマにあったからと顧の日記に記された。高が言うには、動員された「彼（女）等がいったん土地改革への参加に署名したら、率先して署名した三〇名ほどの積極分子はすぐそこから退出し、他の運動参加の動員に再度手本として率先する役割を果たすように切り替えた」とされる。大学内における動員の仕組の一端がうかがわれる。結局、高は土地改革への参加を選んだが、より危険性の高い対米戦争の現場からは避けたかったのである。

世界大戦勃発への不安は、上海市の南西方向にある杭州市に位置する浙江大学の教員にもみられた。同大学の物理学教授を務めていた束星海はその一人であった。束の子女の証言によれば、かれは何回も毛沢東宛に書簡や電報を送り、以下の理由に基づいて出兵の弊害を力説した。第一に、新政権が成立してわずか一年、長期にわたる内外戦争の傷跡がまだ癒されておらず、財政事情が厳しく、「人民にもつとも必要なのは、民力を休養し、生活を再建することである。」第二に、解放軍の将兵も連年の戦闘で肉体的にも精神的にも疲労困憊しているため、「さしあつて最大限にできることは休息よりほかはない。」第三に、何よりも、米軍と比べて解放軍は装備があまりにも貧弱で、制空権をまったく持たず、「数倍もの優勢の兵力がなければ、勝てそうにない。」結論として、「みずから火の粉を招くようなことは絶対に避け、東北地域の国境線沿いに大軍を配置するのとどめるべきだ。かりに将来、どうしても戦争が避けられないような状況が生じたとしても、経済が回復し発展してから動いても遅くない。」林彪らの唱えていた避戦論に通じるところがあつた。<sup>(40)</sup>

後に出兵が事実となつてからも、束は、「絶対に三八度線を越えてはならない」と表明した。かれは、その個人

檔案フイルの記録によれば、「思想的に非常に（米）帝国主義を恐れ、また世界大戦がやってきてしまうと泣きながら語り、三八度線を越えないよう毛主席に慎重に対応することを求める書簡を書き送ったと述べていた」<sup>(41)</sup>と記される。この記述から、束のとなっていた避戦の立場の真剣さがうかがわれる。

こうした束の意見の背景には、かれの若い頃の留学経験に基づいたソ連への不信感とアメリカへの理解があった。一九〇七年生まれの束は、一九二六年にまずカンザス州の大学に入り、まもなくカリフォルニア大学に移ったが、建設現場で過酷な肉体労働に携わる中国人労働者の住むサンフランシスコの華人会館にしばらく寄寓したことから、アメリカ共産党や革命志向をもつ中国系知識人らと共同で雑誌を発行した。その後、ソ連では資本主義制度の弊害が消滅したことを聞知し、救国の道を模索すべく翌年ソ連に渡った。駐モスクワ中国大使館で働きながらソ連社会を観察したが、彼の自伝によれば、「いたるところに、汚い闇市、千鳥足の酔っ払い、無気力の車夫……がいた。政権を固めるべく、ほぼ毎日、銃殺刑が行われた。」スターリンによる政治的粛清の厳しい現実<sup>(42)</sup>に失望した束はソ連を去って、エディンバラ大学につづきマサチューセッツ工科大学等で学問に専念する道を選んだ。

一九二〇年代のアメリカでは、人種意識からアジアからの移民が排斥されたが、他方で、平和に寄与する国際間の相互理解が推進され、たとえば一九二九年には全米に約一万人の留学生のほぼ半分が中国（三千）と日本（二千）から受け入れられた。<sup>(43)</sup>束のアメリカ留学は、まさにこの流れのなかで曲折な軌跡を描きながら結実したのである。その意味で、一九五〇年に束にみられた対米避戦の姿勢も、国際間の教育、学術文化交流を通じて平和を促進するといふ一九二〇年代の取組みの遺産の一つであった。

## 2、無錫、常州、鎮江、南京

上海周辺の無錫市でも、トルーマン声明の発表後、市民の動揺により、物価が乱高下した。金は価格が一三〇萬元から一五〇萬元にまで騰がり、それでも売惜しみのため市場で入手することができなかった。砂糖はそれ以上の値上げ幅で、六千元から一萬元に騰貴した。市民の間で、「アメリカの軍事介入を受けて台湾解放が不可能となったから、今後砂糖の輸入はますます少なくなる。早く買い溜めした方がいい」と考えられたからである。砂糖以外に、食油、餅、煙草、灯油などの日常生活用品も軒並み価格が上昇した。『蘇南日報』七月五日付の通信によれば、一部の労働者や学生の間では、「アメリカの飛行機と軍艦が強力で、台湾の解放はもう無理だと思ふ」、「第三次世界大戦が起きそうだ。南北朝鮮間の戦争は大戦の導火線になる」という意見が語られた。また、榮毅仁の経営した申新紡績公司の無錫工場に勤めたある女工は日ごろ政治活動にとでも活躍していたが、母親からは活動を慎むよう戒められ、「世界大戦はすでに勃発した」ことがその理由であった。城東鼎昌生糸工場の社長も上海の友人から、大戦後の「社会体制に難なく対応するためには慎重に身を処すよう」忠告を受けた。<sup>(44)</sup>

九月一五日アメリカ軍の仁川上陸後、無錫の市民は一層、動揺した。三日後の月曜日、一八日から二一日にかけて、金の価格は一一二萬元から一四〇萬元に急騰し、一〇月七日現在、四日前に韓国軍が三八度線を突破して北進を開始したこともあって、依然として一三五萬元前後に高くとどまった。本来、秋の収穫期を迎えて営業規模の拡大を計画していたある百貨店も、「静観に態度を改めた。」一部の経営者は、「毎日『台湾のラジオ局』や『ボイス・オブ・アメリカ』を聴取し、新華社通信を信用しない。甚だしい場合は『占い師』に意見を求める者まで現れた。<sup>(45)</sup>」

見通しが不透明であることへの不安は、無錫の隣の常州市民にも見られた。新華社華東總支社の七月一〇日付通信によれば、同地の武進小河区の農家と幹部の間では、「政治権が変わる」可能性に関する認識の一致が広く見られた。そのため、新政権の進めていた活動に関わるのを躊躇い、「現状は、毛沢東がいる一方、蒋介石もいる。統一していないから、やりにくい。一つにしたらいいのに」との意見が広まり、情勢を静観する態度がみられた。ある市民は、「国民党軍は数十万人しか残っていないとは言え、勝てないとも限らない。共産党だって最初は数十万人に過ぎなかった」と述べた。また、共産党幹部に対して、「あなたたちは国民党が来れば北へ撤退すれば問題ないかもしれないが、われわれはここに家があるから、そうはいかない」と述べて距離を保つ農家も現れた。そして、幹部を含め教育を受けた農村住民は「均しく原爆に恐怖感を抱いている。たいていの人は、すでに世界大戦が起きた」と思っている」と報告された。<sup>(46)</sup>

一般市民に限らず、幹部まで世界大戦を忌避するという現象は、無錫も同様であった。無錫地域のある幹部は、「新聞には「團結して米帝の挑発を打ち負かせと毛主席が呼びかけ」という大書の見出しがあるが、それを目にする度に心臓がどきどきする」と述べ、また、「ソ連には原爆がなく、アメリカには勝てない」という意見を固く信じる幹部もいた。<sup>(47)</sup>そして市民は、「第三次大戦（が誘発されるの）を恐れることから、台湾への進攻はもういいだろう。やぶ蛇になりかねないから。何十年も日本人の手にあって取り戻せなかったし。ほっとけばいい。そうしないと、戦争に巻き込まれる。われわれ無錫のような（小さな）ところは、原爆一個でも落とされたら、一巻の終わりだ」と述べた人も少なからずいる」と『蘇南日報』七月八日付の電信によって報告された。<sup>(48)</sup>

興味ぶかいことに、延安時代に一時、共産党の最高指導者まで務めた張聞天も、数年後にそれと同じ意見を示した。一九五四年秋に、朝鮮戦争休戦後に政府活動の重点をすぐ台湾問題に移さなかったことを毛沢東が批判したが、

それに対して外交部筆頭副部長の張聞天は、「台湾の解放を急いで、反米急先鋒の役をすすんで買って出るようなことをすべきではない。それより、まず大陸のことをよくすべきだ。台湾は日本に五〇年も占領されていたが、中国は中国のままだったのでないか」と周囲に語ったのである。<sup>(49)</sup>張は一九〇〇年に無錫に近い江蘇省内の南曩県に生を享け、一九七六年に無錫で死去した。みずからと縁の深い地域の幹部の意見と偶然に一致したかもしれないが、この幹部発言の記事が『内部参考』に掲載された一九五〇年七月、国連駐在首席代表に任命された張が赴任の準備をしながら外交部で待機し、党内でも中央政治局委員の立場にいたことから、その記事を目にしたことは十分考えられる。いづれにしても、大陸地域の内治優先派とみられる張がその考えに共鳴したことは間違いない。国内統一の完成と位置づけられた台湾解放に関することすら、それによつて生じかねない米中軍事衝突を避けるべきという意見であつたとすれば、海外派兵となる朝鮮戦争への参戦についてはなおさら否定的であつたように思われる。

世界大戦や原爆を恐れる意見は、常州の北に位置する鎮江市でも広く観測され、とくに米軍機による鴨緑江の中国側領空侵犯が報じられた以降は、一層強まった。政府の宣伝を受けて「アメリカ帝国主義は意図的にわれわれを挑発しているが、爆弾を落とされても怖くない」と一部の市民の間で語られるようにはなつた。しかし、「一般市民は相変わらずアメリカを恐れ、原爆を恐れていた。やはりアメリカが強い。朝鮮を空爆したら、今度は中国か。ふつうの爆弾ならまだいいが、原爆となつたら大変だ。鎮江あたりだと、原爆一個でお仕舞だ」と語られ、解放軍では太刀打ち出来るのか」と疑問視され、悲観的な空気が蔓延した。<sup>(50)</sup>

大戦を忌避する心理は、もっぱら原爆に対する恐怖感だけから生じたものではなかつた。少なくとも経営者の間では、「万が一戦争になつた場合、税金はいつそう増えそうだ」と語られたことから、経済活動に支障を来たすことへの強い懸念があつたように思われる。それに加えて、当該地方の文化と歴史観の沈殿も背景にあつたようであ

る。というのは、『蘇南日報』七月八日付の通信によれば、無錫市のある有力者が、「万が一戦争になった場合、また田舎に移り住む破目になりそうだから、今のうちにいい生活をしておくことに越したことはない」と語ったからである<sup>(51)</sup>。ここで注目されるべきは、この有力者の終末論的認識よりも、田舎への移住が予想された点である。長江の下流域一円では、昔から「小乱は城内に住み、大乱は田舎に住む」という諺があり、小規模の匪賊の騷擾からは城壁によって守られるが、政權交替が伴うような乱世には戦火を免れるのに、むしろ戦略的拠点である都市から辺鄙な農村に疎開すべきという市民の知恵である。

このような戦乱への対処法は、中国市民特有のものではなく、日本市民にとつても、必ずしも縁遠いことではない。日本近現代史上、森鷗外の史伝『渡江抽齋』で描かれた、幕府「瓦解」のなか江戸を引き払って弘前藩に移転した渡江氏一家の行動がそれにあたり、その七〇余年後、太平洋戦争中に大空襲を受けた都会からの疎開はさらに広い範囲で行われ、今日まで広くその体験が語り継がれている<sup>(52)</sup>。

長江下流の当該地域では、その約三百年前の明清交替が行われた一六四五年に、明軍の守備した揚州城を滿州族軍が攻め落とし、その後一〇日間も続いた「揚州屠城」<sup>(54)</sup>が起き、約二百年後の一八六四年に太平天国の首都天京（南京）を攻略した曾国藩麾下の湘軍による虐殺があった<sup>(55)</sup>。それに続き、朝鮮戦争勃発の年から遡ってわずか一三年前に、日本軍による「南京虐殺事件」<sup>(56)</sup>があった。これらに匹敵するほどの「大乱」が起きかねないことへの強い不安は、無錫のその有力者をはじめ、多くの市民の脳裏を過ぎつたように思われる。

実際、その有力者の憂慮にみられた歴史的教訓が如何に広く共有されたかを裏付けるように、同じ諺は半世紀近く経過した一九九七年に、励以寧・北京大学経済学教授によって、『光明日報』の掲載論文で言及された<sup>(57)</sup>。鎮江と南京の間に位置する儀征を本籍地にもつ励本人は一九三〇年に当時の首都南京で生まれ、一九三七年一月には一

家すでに上海の租界に移住していたため、南京事件の難を免れたが、租界も日本軍によって占領された太平洋戦争勃発後は、湖南省北西部にある沅陵県に疎開した。同県は、秦の時代の戦乱を逃れて平和に暮らしたとされる陶淵明の『桃花源記』の舞台に因んだ桃源県からさらに西側の奥地にあり、日中戦争中に日本の軍勢が一度も及ばなかった僻地であった。戦後、南京に戻って抜群の成績で高校を卒業し、一九四八年末に成績優秀者として大学入試が免除され、念願の金陵大学化学工学科に合格した。かれの弟子の手となる評伝によれば、励は北京大学経済学部を目指して一九五一年に湖南省長沙市で入学試験を受け、それまでは「新政権の下で創設された沅陵県教育用具消費合作社に会計係として一年あまり勤めていた」とされる<sup>58</sup>。しかしその評伝では、金陵大学に進学することになった励はその後どうしたのか、なぜ南京で勉学に励むはずの青年が急に沅陵県の合作社に就職したのかについては触れず、ただ一言「戦争が全てを変えてしまった」と片付けた。同時期をみれば、解放軍の長江を渡る作戦が開始したのは一九四九年四月二日であり<sup>59</sup>、沅陵県人民政府が成立したのは同年一〇月八日である。一九四九年初春までに、励は南京をめぐる国共両軍の争奪戦を予想して少年時代を過ごした沅陵にふたたび避難したと推測される。

励は一九九七年の論文で、前述の諺について次のように説明した。「大乱の時、人々は何故田舎に避難したのか。それは、政府の力では都市の秩序すら維持することができなくなったため、人々は、田舎に逃げたのである。しかも避難先は辺鄙であればあるほど、安全感が得られたのである」<sup>60</sup>つまり、前述の諺は励とその同時代の多くの中国市民の共通した人生経験そのものであった。

評伝では、励が北京大学を目指したのは「仕事のなかで自らの知識の乏しさ」を痛感したからと説明される。識字率がきわめて低かった当時の中国のなかでも、経済文化的に遅れた僻地にある同県の文房具を扱う小さな合作社の会計係に、北京大学で経済学を学ばなければ対応できないと青年を痛感させたほど難しい仕事はどのようなもの

であつたらうか。僻地の経済について、励自身は一九九七年の論文で次のように述べている。「そこでは、市場による調節はできない。そもそも大乱の状況においては、市場取引が止まり、市場による調節は機能しにくい。他方、政府による調節は、平時ですら山村に及ぶ影響力が微弱にとどまる程度であることから、大乱の時には全く機能不全に陥る可能性がある。田舎、とりわけ辺鄙な山村では、経済がどのように運営され、資源がどのように配分されるのか。それは、第三の調節方法、すなわち習慣と道義による調節である」<sup>61</sup>つまり僻地では、「見えざる手」や「見える手」による配分が必要とされるほど複雑な経済はそもそも存在しない、というのが励の認識である。

かりに、沅陵の経済が例外的に複雑であつたとすれば、そのような思いは前年も抱かれていたはずである。なぜ前年に青年を北京大学受験の行動に移させるほど強くなかつたのであろうか。これについても、その評伝では何ら語られていない。ただ、沅陵に避難していた青年は一九五一年春夏の頃、評伝によれば、「意を決して」北京大学の受験を目指したとされるが、それは朝鮮戦争が局地化して新政権が一応安定し、北京はほぼ安全となつたと判断されたからであらう。言い換えれば、一九五〇年夏秋の北京は勃発しかねない第三次世界大戦の脅威に晒された、青年は沅陵で観察していたのである。

では、僻地で青年が静観していた頃の南京市民は、どのように朝鮮戦争に反応したのであろうか。新華社南京支社の七月二四日付通信によれば、ある労働者は「なぜソ連は出兵して北朝鮮を援助しないのか」と疑問視し、当時行われていた平和署名活動については、「向こうは陸海空軍すべて出動させたのに、署名したところで何になるのか」という問題を提起した。一部の投機的な商人は、「米蔣の帰還」に期待をかけ、「好機到来」として、白砂糖、食糧、輸入品を買い溜めて売惜しみ、「米蔣を相手に賃貸できるように不動産物件を用意した。」失業者の中には、「どうにかなる日がやってきた」と述べる人もいた。商工業界と教育界では、それまで政治活動に積極的であつた



市民のうち、「米蔣が戻ってきたら酷い目に遭うので」と言動を慎しむようになった人もいた。一般市民の間では、「トルーマンが南朝鮮に出兵し、台湾海峡をコントロールしたということは、アメリカの強大さの現れだ」、「アメリカに原爆があるのは事実だ。ソ連にもあるというのは法螺だ」、「台湾の解放に自信がなく、遅々として始まらないことからすると、第三次大戦を恐れているだろう」と語られた。そのなかで、「蔣、米、日の計画では、一カ月後に大陸反攻することになる」とか、国民政府の南京市長を務めた「呉鉄城は日本から三〇万の兵隊を借りて大陸に攻めてきた」、「東北地域では遼寧省海城県まで、上海では呉淞まですでに攻めてきた」といった国民党の工作員によるものとみられる流言もあり、社会は強い不安の空気に包まれた。<sup>63</sup>

このような不安は、約一カ月後の八月末頃、政府の宣伝活動と、釜山周辺まで北朝鮮軍が攻め込んだ戦況の展開とによって、いくぶん緩和された。しかし主として個人経営の小売業者や一般市民、主婦の間では、「アメリカは小国の朝鮮にも勝てない」という過度な樂觀論が生じた一方、「あれほどの財力をもつアメリカが負けるわけはない」と依然としてアメリカの実力を過大に評価する人や風向きが定まるまで「中庸」な態度をとろうと主張する人、われ関せずの態度をとる人、または「米帝打倒を叫んでも、日帝打倒を叫んだ頃のように、やる気が出ない」と述べる消極派も相変わらずいた」と新華社南京支社の通信で報告された。<sup>64</sup>

ここで注目すべき点は、南京市民にみられた「抗米」と「抗日」への姿勢の相違である。それを南京市民の米日に対する心理的親疎の観点から捉えれば、むしろ日中戦争中に起きた歴史的要因が背景にあったことは否定できないが、それ以上に安全保障の観点から考察する必要がある。つまり、侵略に対して自らの国土で抵抗したかつての「抗日」と、直接に武力攻撃も受けずに同じ価値観を共有する同盟国（ソ連）や準同盟国（北朝鮮）を助けるべく「海外派兵」することになりかねない「抗米」とは、同じく「自衛」や「平和」のためと表現されても、全く性格

の異なるものとして、市民が本能的に察知したのである。

### 三、東北地域（瀋陽、錦州、熱河）

次に、もつとも戦場に近かった東北地域の市民の反応を考察する。

この地域の中心的工業都市の瀋陽では、新華社東北総支社の七月一日付通信によれば、戦争勃発後、「朝鮮戦争の勃発は第三次世界大戦の導火線だ」との認識をたいていの人がもっている」ことから、次のような風聞が広まった。「アメリカが参戦し、世界大戦は始まった」、「マッカーサーが怒った。日本から飛行機を五百機出し、台湾から軍艦三隻を再配置してきた」、「ソ連はすでに無条件降伏した。毛沢東は戦犯として逮捕される」、「蒋介石が九つの兵団を率いて南部朝鮮に上陸し、大戦は迫ってきている。米軍と日本軍はみな参戦した。海上封鎖はもちろんのこと、空からも瀋陽まで爆撃に来るぞ」、「平壤は爆撃で平らになった。北朝鮮はもう駄目だ」、「アメリカがさきに北朝鮮から手をつけたのはよく考えたものだ。ソ連の兵力をアジアに引きつけ、そのうえでヨーロッパを叩けば楽勝だから」、「中国からは八〇万人の解放軍と数百機の飛行機が北朝鮮に派遣され参戦した」、「アメリカは蒋介石とともにすでに海南島を取り戻した。林彪は戦死した」<sup>(65)</sup>

これらの伝聞は、主として商工業界者と行商業者の間で流れたが、非（避）戦感情は階層を問わず広く社会に共有された。その表れとして、市民の間では、「中国はようやく平和になったのだから、戦争にはもう懲り懲りだ。また戦になったら、たまったものではない。何時になったら戦乱の苦しみを免れるのか」と語られたのである。<sup>(66)</sup>

それと異なって、「好機到来」と受け止める人々もいた。とくに前政権関係者にその傾向が強く、「ようやく希望

が見えてきた。この政権を倒さなければ活路は見出せない」として、相互に連絡をとり合つて集会を開いた。自首して登録するよう求めた新政権の政策に応じずに静観してきた前政権のある関係者は、「みずから先見の明があった」と述べ、行商業者を組織し、蒋介石の軍勢が及んできた暁には、それに呼応して百貨店やその他の国営企業と銀行を占拠する計画を立てた。かれらの言うところによれば、「まもなくまた、八・一五<sup>67</sup>がやってくる。市政府のビルの接收担当者を決めることを含め、準備しておかなければならない。その際、地上からも空からも、いっせいにやってくる。素晴らしい」とされた。

以上みたように、政治的立場に相違があつても、大戦勃発および米軍の勝利という見立ては共有されたようである。これには、在留外国人市民も例外ではなかった。某国の元領事夫人は、朝鮮戦争勃発後、「ソ連の出番になってきたが、ソ連は出兵して北朝鮮を援助するようなことはしないと信じる」と語った。また、ある外国人神父は、「朝鮮戦争はソ連に唆されて以前から準備されたものだ。その計画にしたがつて北朝鮮側が先制攻撃をしかけた」と語った。これらの発言も何らかの形で、周囲の中国市民の情勢認識に影響を与えたように思われる。<sup>(68)</sup> 風雲急を告げるなか、新政権に寝返りした元国民党軍のある師団長は、国民党側の「赦しを乞うことを試みようとしてそわそわした。」また、工場等で働く中国南部出身の技術者は、「動揺して落ち込み、つねに不安感にとらわれた。東北地域が戦争の中心地になりかねないと考えられ、とくに工場が空爆の標的になるのを恐れたからである」と報告された。<sup>(69)</sup> こうした市民の不安は、瀋陽の市場に端的に現れた。紙幣を金銀に兌換すべく市民が貴金属店等に殺到したこともあり、金の価格は六月二八日の一両当り一四二〇万元から七月三日の一八五〇万元に騰がり、相場の実像をより正確に反映した闇市では、二〇二〇万円にまで騰貴した。販売量も急増し、城内の東祥金店を例にとれば、二八日以前は一日に一、三百両程度しか売れなかったが、三〇日は一日で一千六百両も売られた。その反面、銀行の預金

額は急激に減り、商業銀行の平和区支店の次席支配人によれば、「六月三〇日から七月三日までの間、同支店の一〇〇億元あつた預金額はその四分の一にあたる二〇億元も減り、本店では三〇億元近くも減少した」と言われた。<sup>(70)</sup>

市民の不安は、当時進められていた平和署名活動への態度にもみられた。市民の批判は主として、署名活動の「非現実性」に向けられたようである。例えば、「相手は原爆を落としてくる。署名さえすれば止められるのか」と疑問を呈し、「原爆を恐れて、署名して反対するのはいいが、その使用を止めることはできない。勝てないから降参したのと同じだ」と述べて冷淡な態度を示す市民がいた。また、「布に名前を書いておけば落とされてくる原爆を受け止めるのか。遅かれ早かれやられる<sup>ディオナウグマイ</sup>」と悲観し、「署名は、集会で一回、勤務先の薬局で一回、自宅の町内で一回した。人数が多ければ力も大きくなる。アメリカさんが来たら、拳骨を振るって追い出す」と皮肉を述べる市民もいた。甚だしい場合は、「ノルマ達成のため、氏名を捏造して名簿に署名する市民すらい」と新華社東北総支社の七月一日付通信で報告された。<sup>(71)</sup> ちなみに、同様の状況は上海にも観測された。顧頡剛のある親戚の証言によれば、「自宅のある慈厚南里では署名への協力が求められたが、応じるものは一人もおらず」、顧自身の勤務先では同僚らが「それぞれ六、七人分の署名をし」、また子供たちの通う託児所の「王所長からもなるべく多く署名するよう依頼されたが、夫婦ともすでに署名済みのため、三人の幼児の氏名を書いてあげた」と日記に記される。<sup>(72)</sup>

こうした状況の背景には、署名運動に関するいくつかの問題点があつたと考えられる。まず、自発性の問題である。署名活動には強制的な空気が強く、必ずしも広く市民から理解されなかつたようである。革命前に小規模な土地を所有したことを理由に吊るし上げられた経験をもつ朱文波の語つたところによれば、「署名しない選択肢はない。しないとすぐラベル張りされるから」と言われる。次に、無関心の問題である。商人をはじめ市民の多くは政治に無関心であつた。それは、「政府の呼びかけていることなら、何でも従つていけば無難だ」、「お上のことはわ

れわれ庶民には分らない」という突き放したような態度からも、うかがわれる。さらに、目まぐるしく展開されたさまざまな運動に駆り出された疲労感のようなものも看過されるべきではない。肉体を使う衛生活動よりは署名活動の方が楽という単純な理由から後者を選んだ人もいたからである。たとえば、市内の極東旅行社に勤めていた李という年配のポーターもその一人で、「これで蠅の撲滅活動に行かなくて済むからいい」と語っていたのである。<sup>(73)</sup>

こうしたなかで語られた意見のうち、戦争に関するいくつかの重要な問題が含まれる。一つは、戦争と平和の関係である。一部の市民は、「平和が欲しいと言いながら、なぜ海南島を解放するのか。進攻しなければ平和になるのではないか」と述べたが、この発言から、内戦も含めて全ての戦争に反対する絶対平和主義の意見や政治目的を達成する手段として実力行使以外の方法を講じるべきという非暴力の立場が看取される。二つは、税金や経済負担の増加、福祉との関係という問題である。当時まだ深刻な食糧不足に悩まされる最中にあり、戦争に備える政策により経済的負担が一層増加するのではないかと強く懸念された。例えば、「いま国民党時代よりも乞食が多い」が、「みんなから税金がたくさん取られたからだ」と語られたのである。三つは、徴兵という血税の負担という問題である。「アメリカがソ連を打ち負かそうとしているが、そのソ連は今、解放軍に百個師団の兵力を借りようとしている。それに応えるために解放軍は署名の方法を考えたのだ。秋になれば、それに基づいて徴兵される」と語る市民もいたことから、兵役のことが強く意識されたように思われる。<sup>(74)</sup>

大戦勃発への不安は、瀋陽の南にある錦州と熱河でも、広く共有された。新華社東北総支社の電信によれば、同地域の大多数の市民は、朝鮮と台湾海峡にアメリカが軍事介入してきた以上、ソ連は北朝鮮の失敗を座視することができないし、中ソ友好同盟相互援助条約に基づいて出兵してくれるであろうことから、世界戦争は避けられないと観測した。そして「ソ連が遅々として援軍を送らないのを見て、ソ連や政府の言ったことを疑うようになった。」

同盟国による集团的自衛権の行使という安<sup>マシツクケワンド</sup>保装置に対する失望がうかがわれる。しかも、それは一般市民にとどまらず、幹部の大多数にも共有される疑念となった。一部の古参幹部ですら、「戦争に関する国民党反動派のデマは人民を騙すもので全く事実無根だ」という毛沢東の言葉を疑った。「一部の下級幹部は、アメリカ軍が北朝鮮を北上し鴨緑江を越えて熱河まで侵攻してきたら、自分たちは再びゲリラ戦に行かざるを得なくなる」ことを深く憂慮した。<sup>(75)</sup>

労働者には、政府の宣伝を受けたためか、「人民側の力が強大だと抽象的に理解し、帝国主義が戦いに弱く、一旦戦争になればみんな解放されるから、早く戦争になってほしい」と望む人も数多く見られた<sup>(76)</sup>が、「知識をもつ人の多くは、北朝鮮にアメリカが原爆を投下する可能性に不安を感じた。」また、北朝鮮軍が南部に向かって進撃し続けた七月中旬の時期においても、市民は、「北朝鮮軍の勝利を報じた政府側の発表を信じず」、「アメリカが空爆で平壤を平らにした」と語っていた。

この地域の市民がこれほどまでに空襲を恐れたのは、その一九年前の満州事変の際に受けた関東軍からの爆撃体験と無関係ではなかった。市民に広く読まれていた新聞『大公報』一九三二年一〇月の記事によれば、八日午後、日本軍の飛行機が一二機、突然に錦州に飛来し、三〇分以上にわたって、駅を含む城内各所に爆弾を投下しながら「極めて低い高度に下げ、抵抗のすべもなく、心の準備すらなかった市民に向けて機銃掃射を行った。」当日午後五時現在の不完全な統計では、鉄道車両や電線、駅前旅館、果物屋を含む多数の建物が破壊され、「死者二、三〇人、負傷者四、五〇人」に達し、城内外の市民は「混乱を極め……極度の恐怖に陥れられた。」さらに、二日後の建国記念日に日本軍機が再度飛来し、「遼河以西地域の市民は挙って逃げまどい」、広範囲にわたって治安が乱れ、「匪賊の被害にも見舞われた。」<sup>(77)</sup>

朝鮮戦争がきっかけとなって「錦州爆撃」のような悪夢が再来するのではないかと受け止められても不思議ではなかった。国民党軍がすでに広東と大連に上陸したという流言もあって、錦州市民は競って紙幣を手放して貴金属を購入し、「十数万円しかもっていない行人商人ですら、所持金を銀貨に両替しておいた。」このような状況の中で、金価は一両当たり一三〇〇余万元から一七〇〇余万元に、銀貨は一枚九萬一千元から一三万円に暴騰した。原爆投下に対する不安感から生じた終末的恐怖に駆られて急に「牛飲馬食」し始める市民も一部いたようで、「人心は動揺を極めた」と新華社東北総支社の電信で報告された。<sup>(78)</sup>

#### 四、西南地域（重慶、貴州）

最後に、朝鮮半島からもっとも遠く離れた西南地域の市民の反応を考察する。

西南地域は日中戦争時、国民政府の臨時首都が重慶に置かれたことから分かるように、「大後方」地域ではあった。しかし、新たな世界戦争の勃発を恐れる市民の不安は、他の地域とさほど変わらなかった。何故なら、近代の戦争が前線と後方の違いを無意味なものにしたことは、その数年前までに日本軍による激しい無差別空爆を受けた体験から、重慶市民が誰よりも熟知していたからである。重慶爆撃は例えば、一九三九年五月三日と四日に中心部の市街地に焼夷弾を含む爆弾が投下され、死傷者一〇〇〇〇人に達したと言われるほど大きな被害が生じ、翌年五月一八日から九月四日の間、計八〇回にわたって約一万一〇〇〇発の爆弾が投下されたいわゆる「百一号作戦」が行われたが、それぞれ「五三<sup>ウイサン</sup>、五四<sup>ウイスト</sup>の夏」と「疲労の夏」という表現で語り継がれた。そして一九四一年に「百二号作戦」が行われ、そのなかで六月五日夜に空襲を避けるべく市民が防空壕に殺到したため数千人が将棋倒しと

なつて息絶え、「隧道大惨案」として重慶市民に記憶されたのである。<sup>(79)</sup>

実際、朝鮮戦争勃発を受けて重慶市民の間では、その五年ほど前まで続いていた日中戦争中の経験が思い出されていた。もともと借り手市場であった賃貸住宅が急に貸し手市場に変わり、「戦争が勃発し、かつて（日中戦争中）のように、長江の下流地域から避難民がまた流入するのを見越して貸し惜しみが進み、家賃も騰がるであろうと予測された」からである。<sup>(80)</sup> 賃貸住宅市場に限らず、それ以外の市場も大きく価格の変動がみられた。八月一六日付の中央政府貿易部の報告書によれば、六月二四日から七月七日の間、重慶市の紡績染色用原料であるサルファ・ブルーの価格は一バレル一四〇万元から一六五万元に一七・九%上昇し、乱世に強いとされた金の価格は一両あたり一〇五万元から一三五万元に二八・六%騰がり、主に輸入に依存した砂糖は一キロあたり五九二〇元から七六〇〇元に二八・四%騰貴した。<sup>(81)</sup>

戦争に対する不安とその反映としての物価変動は、重慶市にとどまらず、四川省の東部全域に共通してみられる現象であった。事実、それは重慶市を含む四川省東部の六つの地域を統括する行政単位であった「川東行政署」の商工業庁が作成した「一九五〇年度商工業活動に関する総括報告書」によつて確認される。それによれば、「六、七月以降、……朝鮮戦争の影響を受けてわが川東区の市場における輸入物資の価格が上昇し、輸出用の特産品価格が下落した」のである。<sup>(82)</sup> また、同様の状況は、重慶の南隣にある貴州省の首府貴陽市においても観測された。一〇月中旬の新華社貴州支社の通信によれば、貴陽市の「商工業者の大多数、一部の市民や各政府機関に留用した旧政権の公務員、新規に採用された新卒間もない公務員の間では、第三次世界大戦はすでに勃発し、強い実力をもつアメリカが必ず勝つと一般に考えられ、人々の思想が混乱して議論百出した。」その影響を受けて、「米、塩、布の価格は不安定であった」と報じられた。<sup>(83)</sup>



重慶の商工業界では、新華社西南総支社の七月二四日付通信によれば、「朝鮮戦争は世界大戦の始まりだ」、「アメリカが朝鮮で勝てば戦争は拡大しないであろうが、引き続き敗走した場合は、面目がないので、原爆が使われかねない。そうなった場合、重慶も無事ではすまないであろう」という意見がみられた。教育文化関係者の間では、「まだ大陸地域を建設する途中にあるのに、急いで台湾を回収する理由は分からない。朝鮮は外国なので、なおさらだ。とにかくアメリカを刺激すべきではない」という意見が語られた。<sup>84</sup>これは、前述の天津や無錫の市民にみられた意見と共通するものであった。

その夏に卒業した学生のうち、「当初東北地域に就職する予定の卒業生は、いったん大戦になれば、真つ先に東北がやられるという認識から、全員、東北への赴任を躊躇するようになった」<sup>85</sup>とくに北朝鮮軍がソウルから敗退した一〇月に入り、青年を中心に市民の間でますます動揺が強まった。新華社西南総支社の一〇月一〇日付通信によれば、重慶市の青年には三種類の考えがあった。

一つは、「世界の平和を欲する勢力の強さを過信する」タイプであった。彼らは「どうせ社会主義陣営に勝利が歸するに決まっているという考えから、戦争への警戒感を緩め、戦争を防ぐには平和への努力が重要な意味をもつことについての認識が足りなかった。」二つは、ソ連が出兵しないことを批判し、「周恩来外相が抗議に終始する理由は分からない」と疑問を呈し、「侵略者を打ち負かす力をもっているというなら、いつそのこと派兵して片付ければいいのに」と不満を溢すタイプであった。その認識から、「一部の学校では、朝鮮戦争に実力を行使するよう中央人民政府に求める署名活動が行われた。」この威勢のいい主張はもっぱら政府の宣伝を受けた「進歩的な学生」によるものと思われがちであるが、この通信記事では、興味深いことに、それが「軽拳妄動的な傾向」として位置づけられ、その背後に「敵対勢力の策謀があるかもしれない」と評された。つまり、アメリカ軍に勝てないことを

見越して表面上、過激なことを主張してそれに対応できないであろう政府を窮地に陥れるというのが、問題とされた実行力主張者の「真意」であり、記者もまた同様の力関係認識を前提に、その「真意」を看取したのである。そして三つは、共産主義「青年団の脱退を求めた」一部の団員の行動にみられるように、新政権の敗北を予想し、中立の立場をとり始めたタイプであった<sup>(86)</sup>。

では、以上のような青年の在学した大学の教授陣は朝鮮戦争にどのような態度をとっていたのであろうか。重慶にあった四川省立教育学院と西南師範学院の外国語学部教授として勤務していた呉宓を例にとりあげる。呉は長年にわたって毎日欠かさず日記をつけていたが、当該時期の一九五〇年の大部分は、文化大革命中に「反動的」とされたことから、それを一時的に保管していた友人によって焼却された。幸いにも、一九五一年の日記が難を免れたため、朝鮮戦争や対米関係に関するかれの態度の一端はうかがわれる。それによれば、一月二日、午後四時から六時まで、同大学で時事に関する学習会が開かれた。朝鮮において第一次、二次戦役に続きアメリカ軍の敗退が報じられた第三次戦役のさなかに当たり、学習会は反米的な熱気に包まれた。ハーバード大学修士課程を修了した呉教授は、「心中甚だ不快ながら、アテナイとスパルタの戦いを類例にし、アメリカが必ず負けることを証明すべく、無理して一回発言せざるを得なかった。」東西対立に関連付けた発言は、もちろん紀元前四世紀後半に起きたギリシアの戦争、すなわち民主政のアテナイ陣営と、市民が集団生活して軍事に専念したスパルタ陣営との間で繰り広げられて後者の勝利に終わったペロポネソス戦争を踏まえて行われたものである。翌日の午前九時から二時間ほど同様の学習会に出席し、「アメリカに弱点があつて必ず作戦に失敗することが以前から分かつて、全アジアの解放と平和は必ず得られる趣旨のことを、相変わらず無理をして発言した」が、「例に従い衆人に同調して発言せざるを得ず、みずからの良心に反する。かといつて時勢にも適わず、誠に慙愧、悔恨に堪えない」と日記に記した<sup>(87)</sup>。

このような苦しい心中は、呉の一月二一日の日記に記された二篇の詩にもよくあらわれている。「時事学習一首」と題する詩では、最初に「マルクス・レーニン主義のみが真理で、千年の歴史を新たに作り直す」と当時流行した文言を引用したうえ、「米国を仇敵にソ連をわが友に、いくさは平和で、暴力は仁<sup>(88)</sup>」と詠んで、時流を辛らつに批判した。この詩から、ジョージ・オーウェルの政治小説『一九八四年』のうちの「眞理省」の白い壁に書かれた「戦争は平和である、自由は屈従である、無知は力である」というスローガンに通じる諷刺は読みとれる<sup>(89)</sup>。また、アメリカ軍が敗退したさなかで詠まれたことから、呉の平和論は、アメリカに勝てないから平和を選ぶという「現実主義」に基づく避戦論よりも、戦争自体を暴力として否定する絶対平和主義に近いように思われる。

同じ詩において呉は、伝統的な詩文が「封建的な毒」として、また欧米伝来のものが「悪魔」のように批判されたことをとりあげた。最後の一句に、「連日、朝から車座して時事を学び、狙い撃ちされて頻々と心を問いただされる<sup>(90)</sup>」とし、その心中の煩悶を詠んだ。「名教授」と題したもう一首の詩では、「三〇年もの教授のささやかな名声も、解放の潮を受けて尽く下がり、急いで詩書を仕舞い込んで呐喊に附和し、不慣れた笑みを作って巧みに媚を売る」と詠んだ。そのうえで、本来学ぶ立場にいたはずの学生が今や教員の学問の自由にとかく干渉してきた現象を批判し、「かつてアメリカに留学したものが一層その国を憎む」と詠み、時流に屈せざるをえない教授陣の姿を自嘲した<sup>(91)</sup>。

そして五月四日、呉は午前一〇時から夕方六時半まで、参戦した中国軍の帰国代表による戦勝報告会につづき、マルクス主義毛沢東思想の教義に関する訓話を聞かされた。同日の日記には、「いま一人の文学者として深く苦しみを感じ、そのうち自殺しなくても、必ず心労で鬱屈して死ぬであろう」と記した<sup>(92)</sup>。ここで注目すべきは、対外戦争の勝利を歓ぶナショナリズムに決して与せず、むしろ勝利を機に強大化した国家権力が対内的に個人の良心や学

問の自由に干渉してきたことに呉が批判を加えたことである。

## おわりに

以上、朝鮮戦争の勃発から、中国の出兵が行われた一〇月下旬まで、全国各地の市民が示した反応について考察を行った。戦場からの地理的な遠近や文化的歴史的经验、経済状況などの相違から、地域間にそれぞれ若干の差異はみられたが、世界大戦勃発の可能性を視野に入れた点に関しては、大方の市民の間で共通していた。また、国共内戦という当時国内政治上の特殊な事情によって生じた一部の例外を除き、大多数の市民は平和を希求し、朝鮮戦争に巻き込まれる危険を憂慮し、強い非（避）戦・厭戦・反戦感情をもっていた。

この時期に中国市民の間で朝鮮戦争について、権力政治の観点からどのような議論が交わされたかという問題は今後の課題として残るが、洋の東西を問わず「戦争と平和」の問題が提起されるたびに、多くの市民が直面してきた諸問題、すなわち、同盟国との関係や海外派兵の可否、軍備の強化による経済的負担の増加、徴兵、ナショナリズムの高揚による個人の自由への侵害などは、本文で見えてきたように、この時期の中国市民にとっても例外ではなく、同様に苦慮せざるを得なかった深刻な問題であった。中国と朝鮮戦争を考察するにあたって、焦点を権力者ではなく市民に当ててはじめて、これまで捨象されてきたこれらの問題に接近できたのである。

(1) 本稿は、二〇一四年七月一日から第一稿の起草に着手し、二〇一五年八月一四日に修正を加え、同九月一八日に最終稿

- を『法学会雑誌』編集担当に提出した。論文の構想自体は、二〇一四年一月二〇日に北京市郊外の香山で開催された「第一次世界大戦百周年を記念するシンポジウム」の報告と質疑応答で紹介し、また同月に文科省科研費（基盤研究C）の申請調書にまとめて同業者（政治学 国際関係論一分野）による審査用に提出した。
- (2) *Allen Whiting, China Crosses the Yalu*, Stanford University Press, 1960 は、イデオロギー重視の時代に、限られた公開資料に基づきながら、ソ連と異なる中国共産党政権固有の視点をも取り入れて中国の政策決定を分析した名著である。
- (3) 代表的な研究に、朱建榮の好著、『毛沢東の朝鮮戦争』（岩波書店、一九九二年、その改訂版は二〇〇四年に岩波現代文庫として刊行）や Chen Jian, *China's Road to the Korean War: the Making of the Sino-American Confrontation*, Columbia University Press, 1994 などがある。
- (4) 沈志華『毛沢東、斯大林与朝鮮戦争』（広東人民出版社、二〇一三年）。沈志華『冷戦在亞洲・朝鮮戦争与中国出兵朝鮮』（九州出版社、二〇一三年）。沈志華『出兵朝鮮の決策過程及動機分析』『炎黄春秋』二〇一五年第二号。
- (5) 「美帝侵略朝鮮後首都市場動態」『内部参考』一九五〇年七月二十八日。
- (6) 「美機侵犯我領空後首都市場略有波動」『内部参考』一九五〇年八月三〇日。
- (7) 宋雲彬『紅塵冷眼』（山西人民出版社、二〇〇二年）一九一、一九七、二〇三頁。
- (8) 同右、一九七頁。陳明遠『知識分子与人民幣時代』（文彙出版社、二〇〇六年）七〇頁。なお、当時の公務員は月給制と供給制とに分かれていた。
- (9) 「美帝侵略朝鮮後首都市場動態」、前掲。
- (10) 「反对美帝侵略台湾朝鮮運動宣傳周總結——第九区反对美帝侵略台湾朝鮮宣傳委員会（一九五〇・八・五）」北京市檔案館、〇四一—〇〇二—〇〇〇—一七。
- (11) 同右。
- (12) 同右。
- (13) 『北京大学紀事（一八九八—一九九七）上卷』（北京大学出版社、一九九八年）四二〇—四二三頁。
- (14) 「反对美帝侵略台湾朝鮮運動宣傳周總結」、前掲。
- (15) W・リップマン『世論（下）』（岩波文庫、一九八七年）二一一—二二二頁。
- (16) 「反对美帝侵略台湾朝鮮運動宣傳周總結」、前掲。
- (17) 「天津出現世界大戦謠言 津市民对朝鮮戦事有疑問」『内部参考』一九五〇年七月一日。
- (18) 「津市商人議論朝鮮戦争将引起第三次大戦的可能」『内部参考』一九五〇年七月一日。

- (19) 同右。
- (20) 「天津市各界對時局的反映」『內部參考』一九五〇年一〇月二四日。
- (21) 同右。
- (22) 同右。
- (23) 同右。
- (24) 「天津出現世界大戰謠言 津市民對朝鮮戰事有疑問」、前掲。
- (25) 「津市商人議論朝鮮戰爭將有引起第三次大戰的可能」、前掲。
- (26) 「天津出現世界大戰謠言 津市民對朝鮮戰事有疑問」、前掲。
- (27) 中國社會科學院・中央檔案館共編『經濟檔案資料(綜合卷)』(中國城市經濟社會出版社、一九九〇年)三九九頁。
- (28) 「津市商人議論朝鮮戰爭將有引起第三次大戰的可能」、前掲。
- (29) 『經濟檔案資料』、前掲、三九七—三九八頁。
- (30) 同右、三九九頁。
- (31) 同右、三九七—三九八頁。
- (32) 「上海工人、學生、教授對杜魯門聲明的反映」『內部參考』一九五〇年七月四日。
- (33) 同右。
- (34) 同右。
- (35) 顧頡剛『顧頡剛全集 日記卷六』(中華書局、二〇一二年)六四九—六五〇頁。
- (36) 同右、六六一、六七七、六八二頁。
- (37) 同右、六七八頁。
- (38) 「上海工人、學生、教授對杜魯門聲明的反映」、前掲。
- (39) 『顧頡剛全集 日記卷六』、前掲、六五一、六六一—六六三頁。
- (40) 劉海軍『東星海檔案』(作家出版社、二〇〇五年)一八三頁。
- (41) 同右、五二頁。
- (42) 同右、九—一三頁。
- (43) 入江昭『二十世紀の戦争と平和』(東京大學出版會、一九八六年)九五頁。
- (44) 「無錫幹部、工人、學生對目前時局的反映」『內部參考』一九五〇年七月二日。

- (45) 「美軍在仁川登陸後無錫工商界思想混乱黄金暴漲」『内部参考』一九五〇年一〇月一三日。
- (46) 「杜魯門反動声明発表後蘇南武進農民和幹部發生「変天」思想」『内部参考』一九五〇年七月二五日。
- (47) 「無錫幹部、工人、学生対目前時局的反映」、前掲。
- (48) 「無錫市民対目前時局的疑慮」『内部参考』一九五〇年七月一九日。
- (49) 何方「我对張聞天的「懺悔」」『看歷史』(成都伝媒集團)二〇一二年三月号。
- (50) 「美機侵犯我東北領空後鎮江群衆反映」『内部参考』一九五〇年九月二日。
- (51) 「無錫市民対目前時局的疑慮」、前掲。
- (52) 森鷗外『鷗外歴史文学集』第五卷(岩波書店、二〇〇〇年)、二四六一―二五六頁。
- (53) 太平洋戦争下の空襲と疎開に関する出版物は夥しいほどある。一例をあげれば、福岡の空襲と疎開を舞台としたものに米倉齊加年の『おとなになれなかつた弟たちに……』(偕成社、一九八三年)があり、しかも中学校の国語教科書に取り入れられ、若い世代に体験が受継がれている。樺島忠夫・宮地裕(ほか三一名)『国語』中学校国語科用(光村図書、二〇一五年)一〇〇―一〇八頁。また、広島原爆を受けた中沢啓治の自伝的作品である漫画『はだしのゲン』は、六七〇万部超のロングセラーである。『朝日新聞』二〇一五年八月二五日号。
- (54) 王秀楚「揚州十日記」松枝茂夫訳『蜀碧・揚州十日記』他『東洋文庫三六(平凡社、一九九四年)一七九―二〇七頁。
- (55) 趙烈文『能静居日記(二)』(岳麓書社、二〇一三年)、八〇五―八〇六頁。なお、同時期に戦火に見舞われた無錫、常州、蘇州、嘉興など各都市の惨状については、リンドレー(増井経夫・今村与志雄訳)『太平天国』4 李秀成の幕下において『東洋文庫五六(平凡社、一九六六年)を参照されたい。
- (56) 秦郁彦『南京事件』(中公新書、一九八六年)。笠原十九司『南京事件』(岩波新書、一九九七年)。藤原彰『南京の日本軍』(天月書店、一九九七年)。
- (57) 励以寧「論習慣与道義調節」『光明日報』一九九七年六月二三日。
- (58) 陸昊『励以寧』(陝西師範大学出版社、二〇〇二年)一一―五頁。
- (59) 「人民解放軍百万大軍横渡長江」『毛沢東文集』第五卷(人民出版社、一九九六年)二八三―二八四頁。
- (60) 「論習慣与道義調節」、前掲。
- (61) 同右。
- (62) 『励以寧』、前掲、五頁。なお、一九五〇年九月と一九五一年九月の北京大学の新生は、それぞれ一〇〇〇余名と二二四〇名(うち経済学科は五〇名)であった。『北京大学紀事』、前掲、四二二、四三三八頁。

- (63) 「南京各階層対時局、調整公私関係与減租繳租問題の反映」『内部参考』一九五〇年七月二四日。
- (64) 「南京各階層対時局和土改の反映及工商界的思想動態」『内部参考』一九五〇年八月三〇日。
- (65) 「瀋陽各階層対朝鮮戦争の反映」『内部参考』一九五〇年七月一三日。
- (66) 同右。
- (67) 同右。
- (68) 同右。
- (69) 同右。
- (70) 同右。
- (71) 「瀋陽各階層対和平簽名運動的反映及反動分子的謠言」『内部参考』一九五〇年七月一三日。
- (72) 「顧頤剛全集 日記卷六」、前掲、六五五、六五八頁。
- (73) 「瀋陽各階層対和平簽名運動的反映及反動分子的謠言」、前掲。
- (74) 同右。
- (75) 「熱河、錦州等地幹部群衆対朝鮮戦事的反映」『内部参考』一九五〇年七月二三日。
- (76) 同右。
- (77) 『大公報』（天津）一九三一年一〇月九日、一一日号。なお、日本軍側やリットン調査団から見た「錦州爆撃」は、防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 満州方面陸軍航空作戦』（朝雲新聞社、一九七二年、二四―二七頁）を参照されたい。
- (78) 「熱河、錦州等地幹部群衆対朝鮮戦事的反映」、前掲。
- (79) 前田哲男『戦略爆撃の思想―ゲルニカ―重慶―広島への軌跡』（朝日新聞社、一九八八年）一六八、二二八―二九、二七八―二八一、二九六―二九七、三〇七―三一九頁。なお、前田氏のこの著作は、副題の通り極めて広い視野から、第二次世界大戦中の都市空爆の相互関係を検証した好著である。
- (80) 「重慶工商、文化界対時局的反映」『内部参考』一九五〇年七月二五日。
- (81) 『経済档案資料』、前掲、三九七頁。
- (82) 川東行署商業庁「工商庁五〇年商業工業工作基本總結報告」建東〇三九―二、四川省档案館。
- (83) 「朝鮮戦争発生後筑市各階層反映」『内部参考』一九五〇年一〇月一八日。
- (84) 「重慶工商、文化界対時局的反映」、前掲。
- (85) 同右。



- (86) 「朝鮮人民軍自漢城撤退後重慶青年思想情況」『内部参考』一九五〇年一〇月二一日。
- (87) 吳宓『吳宓日記 統編』第一冊（生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇六年）二四―二五頁。トウキユデイデス（藤縄謙三・城江良和訳）『歴史』（京大大学術出版会、二〇〇〇―二〇〇三年）。
- (88) 同右、四二頁。
- (89) ショーシ・オーウエル（新庄哲夫訳）『二九八四年』（早川書房、一九八四年）三八頁。
- (90) 『吳宓日記 統編』前掲、四二頁。
- (91) 同右。
- (92) 同右、一二九頁。